書　評

1．黒　岩　俊　郎　著　「資源論ノート」

2．黒　岩　俊　郎　編　「日本資源読本」

評者　吉　田　総　夫*

資源問題の長期的展望のために

「資源」という言葉は，軍需工業動員法（1918年4月公布）によって設置された軍需局第一課の所管事務に「内外国資源の調査」とあるのが初めてであると云われているように，戦前では，国防，国家総動員という立場から資源問題が取り扱われてきた．また戦前では，朝鮮，中国東北地区（旧満州）の植民地に多くの資源を依存していた．それが戦後の国際政治情勢の激変の中で日本の資源政策も大きく変わり，敗戦後の国産資源依存の一時期を経て，貿易加工立国として安価な海外資源と海外導入技術でもって戦後経済を発展させる方向へと転換した．その結果，1960年代には工業生産は飛躍的な拡大をとげ，国民が消費する「資源量」は膨大なものとなり，物質が氾濫する「繁栄の時代」を迎えた．まだこの頃では資源問題についての一般の関心はうすく，1974年以降「資源確保の危機」が云われるようになってから多大の関心が向けられるようになってきた．

資源問題の資料としては，科学技術庁資源調査所編「日本の資源図説(新版)」（1976）や通商産業大臣官房調査統計部編「資源統計年報」(毎年発行)などが政府統計資料として利用できるが，資源問題の歴史的な流れを総合的に把握し，長期的展望を確立していくための参考にするのに手頃な解説書としては，ここで取り上げた2冊が役に立つであろう．

黒岩俊郎の「資源論ノート」では，資源問題を考える際の留意点を次のようにまとめている．

(1) 人間と自然との関係では，作用，反作用の2つの側面を考える必要がある．

(2) 短期的問題と長期的問題がある．

(3) 「資源」といってもいろいろな資源があり，資源ごとに問題の所在が異なることである．

この立場から，序章では「資源問題とは何か」について資源の概念構成を論じている．ここでは資源問題を単に平板な経済地理的な問題に矮小してしまうのでなく，「いったい誰が何のために資源開発，利用するのか」という側面からも見ていくことの重要性を指摘している．

この観点から，第Ⅰ編では日本の資源問題の推移を歴史的に分析し，第Ⅱ編において，基礎的な資源として，金属鉱物，エネルギー，国土，水，海洋を取り上げ，問題の所在の解明に取り組んでいる．

第Ⅰ編の1，2章では，徳川時代，明治時代の資源開発の歴史と教訓について述べている．徳川時代は，閉鎖社会として海外からの資源が一切入ってこない人工的につくり出された資源有限の時代と見てとれるし，同様に短期間とは云え，第2次世界大戦中の日本の状況とも似ている．このことについて3章では，海外資源を遮断された極限状態で日本がどのように資源問題に対応し，破綻していったかについて検討している．しかしこの点では，自給問題に関連して考察は不充分であり検討の余地が多い．

4章では，戦後日本の資源問題の推移を「資源開発と環境」の立場から時代区分を次のように4期に分けている．

* 大阪府立工業技術研究所化学工学研究室長

(1) 1945～1949年：衣食住の絶対的欠乏の時代で，鉱工業生産も低下し，戦後経済復興のために国産資源，国産技術が中心的役割を果たした．

(2) 1950～1960年：海外資源，海外技術に転換し，手厚い国家保護政策によって，鉄鋼，石炭化学，石油化学工業の育成が図られた．

(3) 1961～1970年：日本の資源需要量は拡大の一途を遂げ，世界のいたるところから資源をかき集め，臨界工業地帯が急速に発展し，人口の都市集中と過疎化の進行の中で環境問題が激化してきたことである．

(4) 1971年以降：環境対策が取られはじめたなかで，石油価格の高騰による石油危機の時代に入った．一方，国民生活は物質的には有史以来の豊かな時代を経験するようになったが同時に多くの問題を発生させることになった．

こうして現在では，ＯＰＥＣ諸国の石油生産カルテルの動きに対応する時代を迎えている．

第Ⅱ編では，各資源毎の問題を資源開発利用史の面からまとめている．その中で資源と技術の関係について石炭の例を挙げて「重要なことは，日本の資源条件に合った日本の独自な技術を確立することであり，海外の技術を買い，それに合う原料を捜すことではない」(166頁）と述べていることは，日米エネルギー研究協定の石炭液化技術開発研究の問題(毎日新聞1980年５月14日夕刊）に見られるように重要な指摘である．

なお，著者は，資源開発と環境保全について多くの頁をさいているが，水資源と水質保全の下水道のところでは（238頁）流域下水道の問題（中西準子著「都市の再生と下水道」日本評論社）についてふれられていないのが残念である．

黒岩編集の「日本資源読本」は，基本的には「資源論ノート」と同じ立場から書かれているが，内容は11名の執筆者の論文集のようなものであり，内容的には第１次オイルショック以前に書かれているため，個別的な資源問題の見方には，その後の推移に照らして必らずしも妥当とは云えない部分があるのはやむを得ない．逆に云えばそれほど資源問題の推移が激しいとも云えよう．むしろこの本では，当時話題になったローマクラブの「成長の限界」―「人類の危機」レポート(1972年ダイヤモンド社)の「資源有限」の考えの影響が色濃く見られるのが特徴である．解説書としては「資源論ノート」一冊で充分であるが，「日本資源読本」には「化学工業と資源」(６章)，「食糧資源」(10章）などもあり，資源問題の研究者にとっては内容的にも参考となるところが多い．

(1) ダイヤモンド社（1979年４月第１刷）276頁，1700円

(2) 東洋経済新報社（1973年12月第１刷）273頁，1100円